
二つの箱

風汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの箱

【Nコード】

N3289C

【作者名】

風汰

【あらすじ】

世界にはやらなくて良いことがある。そして、しなくて良い行動をした場合に待っている物は、果たして何か・・・？

プロローグ どちらを開けるかはあなたしだい

こんばんは。くすくす

いきなりだけど、ここに、二つ箱があるわ・・・。

さあ、あなたならはどちらを開ける？

右？それとも、左？

え？この箱の中に何が入っているかですって？

くすくす。いいわ、教えてあげる。

この右の箱の中に入っているのは、恐怖と悲劇。

そして、左に入っているのは、富と名声。

さあ、あなたならどっちを開ける？

勿論、左よね？ふふふ。

でもね、こんな風に箱の中身が分かっていることなんてないわ。

それで、開けてはならない方を開けてしまうの。

そうすると、その人はたちまち抜けられない迷路に迷い込むきょうふの。

あ、抜けられない迷路はないんだっけ？

くすくす、でも抜けた先に待っている物が、同じ《きょうふ》ってのはあるわよね・・・。

今から、私がそんな迷路きょうふに迷い込んだ

人達を教えてあげるわ、そして、あなたはせいぜいそうならないように気をつけなさい。

ブログ どちらを開けるかはあなたしだい（後書き）

つい先日、初めて連載小説を書き始めたのに
こんなのをいきなり書いてすいません。

ですが、書かないと後で後悔しそうでしたので・・・。

ちなみに、全3話構成ですので、すぐに投稿を完了しますw

では、ここまで読んでいただき感謝です。

壱語り 口裂け男

1語り 「口裂け男」

あなた達は、口裂け女って知ってるかしら？
うふふ。知ってるわよね。

有名な都市伝説だものね…ふふ。

でもね、この町では「口裂け女」ではなく「口裂け男」ってのが噂
されてるそうよ。

そんな町で暮らす、迷路に迷い込んだ一人の少女の話よ…くすくす
くす。

私の名前は柿崎美喜^{かきざきみき}。市内の中学にかよう中学生です。

私の学校で今ある噂がささやかれています。

それは、「口裂け男」という物です。

その口裂け男とは季節に関係なくマフラーを巻いていて口をすっぱ
り隠しているんだそうです。

それで、子供が通りかかると、こう聞くんだそうです。

「ねえ…：僕の奥さんを知らないかい？」と

答えると「そこまで案内してくれないかい」と頼むんだそうです。

案内している途中でかれはいろいろと質問をして来るんだそうです。
名前や学年、誕生日などを…。

そして、その場所まで案内すると今度は「一緒に探してくれ」と頼
まれるんだそうです。

そこで「いやです。」と答えるとマフラーを外し「じゃあ。こんな
顔を見たら教えてくれるかい？」と言って耳まで裂けた口を見せる
んだそうです。

そして、子供が逃げようとするすると襲い掛かるんだそうです。

もし「いいですよ。」と言っても、見つからなければ襲い掛かって
きます。

それに、最初に「知りません」と答えても襲われるそうなのです。

結局、殺されてしまうのです。

ですので、対処法として夕方と夜は無闇に一人で歩かない。

それと、聞かれたら他人の名前を出して「その人が知ってますよ」と答えるんだそうです。

すると口裂け男はその人を探しにいくんだそうです。

だから、私は極力夕方にで歩かないことにしていました。

しかし、今日は違いました。

親友の津川裕子つがわゆうこがいなくなったのです。

今日、学校で私は彼女と遊ぶ約束をしていました。

「ねえ？裕子。今日さ、一緒に遊ばない？」

「えー。でも、口裂け男が出るって言うじゃん…。」

「大丈夫だって！それに、対処法だってあるわけじゃん！大丈夫、大丈夫！」

私はそういつて不安がる彼女をなだめました。

すると彼女はしぶしながら承諾してくれました。

そして、学校から帰ってから彼女が来るまで家で待っていました。

しかし、一向に彼女が来る気配がしません。

それで、私は心配になり裕子の家に電話しました、すると、裕子は数時間前に家を出たといわれました。

彼女と私の家の距離は、どう遅く来ても数分でいける距離です。

私は彼女が心配になり、家を飛び出しました……。

そして、道を走っていると、ふと前に人影があらわれました。

その人影はクビに大きなマフラーを巻いていました。その影を見て私は直感的に思いました。

（く……口裂け男！！）

私は、来た道を戻ろうと急いで振り返ろうとした時、その人が私の肩を掴みました。

「ねえ……。僕の奥さんをしらないかい？」

私の体中から嫌な汗が噴出しました。私は上手く回らなくなった口で答えました。

「い……いえ……。しりません……。でも、裕子が知っています……。」「思わず口に出た名前は裕子の名前だった。

すると、その人は少し考えた後に

「ありがとう。じゃあ、その人に聞くとしよう」そう言って私の横を通り過ぎて行きました。

そこで、私はほっとして胸をなでおろしました。

（あ、いそいで裕子を探さなくちゃ！）

また裕子を探そうと走り出そうとした時、後ろからさっき聞いた声が聞こえてきました。

「裕子……。ああ……あのこか……。じゃあ、もう会えないな。」「

その言葉を聞いて私は、恐る恐る後ろを振り向きました。

そこには、さっきまでつけていたマフラーを外し本性を現した口裂け男が鉈を振り上げていました。

「あ……え……裕子がど……どうしたんですか……？」

早く逃げればいいのに、私は聞いてしまいました。

「んー。さっきねえ……。殺しちゃった」

口裂け男は「ふふ」と笑いながら言った。

そして、振り上げた鉈を振り下ろした……。

ゴメン、裕子……。

うふふふふ。どうだったかしら？

彼女は「友情」っていう、二つの箱が並んでいて右の箱をあげちや
ったみたいね。

あそこで、「友情」を開けずにしていたら、彼女は助かったかもね
…。

彼女がどうなったかですって？

うふふ。それを決めるのは、あなたじゃないのかしら。
くすくすくすくすくすくす。

壱語り 口裂け男（後書き）

今回の話はどうでしたか？

ご感想の方をお願いいたします。

では、ここまで読んでくださり感謝です。

式語り 人面犬と犬顔人間

2語り 「人面犬と犬顔人間」

『人面犬』これも、有名よねえ……。

都市伝説の人面犬は人なんて襲わないわよね？うふふ。

今回の町では人面犬だけじゃなく顔が犬の犬顔人間ってのがセツトで現れるらしいわ。

それでねえ……この二匹が一緒に居て、人間を見つけると凶暴化して人を襲うのだそうよ……うふふふ。

今度は抜けられるのかしらねえ……迷路きょうふから。

僕の名前は園田栄治そのだえいじ。

今、僕の住む町ではある噂話がささやかれています。

それは、人面犬と犬顔人間です。

この二匹は夕方になるとあるとおりにだけ現れるんだそうです。

人面犬はその名のとおり、顔が人間。

そして、犬顔人間は首から上が犬なんだそうです。

それで、犬顔人間はスーツ姿で頭に大きな麦藁帽子をかぶっているんだそうです。

人面犬には首輪がついていて首輪から紐が伸びていて、それを犬顔人間が持つてるのだそうです。

そして、この二匹は子供を見つけると襲い掛かってくるのだそうです。

もし、逃げても犬顔人間が臭いを覚えていたら一環の終わりなんだそうです。

最後には家まで来て、その人間を襲うのだそうです。

だから、犬顔人間と人面犬の対処法として

最も簡単なのがその通りを通らない。

それと、二匹からとてつもない腐乱臭がするんだそうです、ですの
で腐乱臭を感じたらすぐに逃げる。

この二つが二匹の対処法です。

だけど、これだけ噂されても僕は絶対にこの二匹の存在を信じな
かった。

だから学校でクラスメイトの男子が聞いてきました。

「おい、園田！お前さ、犬顔人間と人面犬信じてないってマジ？」

「うん。あんなのは大人が作ったうそだよ。だって、口裂け女だっ
て嘘だったんだし」

僕はかるく答えました。すると、一人の男子が言い出しました。

「でも・・・本当に居るって聞いたよ。だって、隣のクラスであつ
た人がいるらしいよ」

「はいはい。そんなの、嘘嘘。みんなの目を集めたかっただけなん
だろうよ。俺は信じないぜ！」

僕が答えると、周りの男子達は「おおー」と声を上げた。

僕はこの瞬間がとてつもなくうれしかった。

「信じてない」って、言えば皆が僕をヒーローのように見てくれる
のです。

すると、集まっていた男子のうち一人が言い出しました。

「じゃあさ！出るって噂の通りを通ってくれよ！」

そのお願いに僕は簡単に首を縦に振りました。

「ああ。いいぜ」

それから、学校が終わり、僕はその噂の通りに来ていました。

噂のためなのか、周りにはほとんど人が居ませんでした。

（でも、まあ居るだけましかな・・・。）

そう思い、僕はその通りを歩き出しました。

噂の通りとは大体200mくらい続く、細い道のことです。

その通りを、半分くらいきたのでしょいか・・・。

ふと、周りを見た。そこには、誰一人居ませんでした。

その瞬間、僕の背中に悪寒が走りました。

（やばい！早く逃げなきゃ！！）僕は瞬間的そう感じました。

急いで残りを抜けようと、全力で走っていると、誰かにぶつかった。

そのとき、僕は腐乱臭を感じていました。

勢いのあまり僕はしりもちをつきいてころびました。

「おい。大丈夫か？」

しりもちをついた僕に向かって、ぶつかった人が言った。

「あ、大丈夫です。心配しないでください」

そういいながら、顔を上げるとそこには人面犬と犬顔人間が居た。

「そんな・・・。本当にいるなんて・・・。」

僕は、恐怖のあまりその二匹を凝視して、止まってしまいました。

そう。僕に話しかけていたのは、ぶつかった人ではなく、人面犬だった。

すると人面犬がしゃべり始めました。

「おい、相棒。今日の獲物はこいつみたいだなー。」

人面犬が僕を見ながら不気味に笑う。

「じゃあ、さっさといただくか・・・。」

だんだんと近づいてくる・・・。

恐怖のあまり、僕は持っていたカバンで思いつき人面犬を殴りつけた。

人面犬は犬のような声を出して、数メートル飛んだ。

そのすきに、僕は走り出した。とにかく、逃げるために全力で走った。

そして、無事に家までついた僕は階段を駆け上り、2階にある自分の部屋へ飛び込んだ。

（嘘だ・・・嘘だ！嘘に決まってる・・・。あれきつと、幻覚だ、そうだ・・・きつとそう！）

心の中で自分に言い聞かせる。

少し落ち着いて、僕はあることに気づいた。

「カバンが・・・ない・・・」

おそらくさっき人面犬を殴った時になくしたのだろう・・・。

「そんな・・・このままじゃあ・・・あの化け物がきちやう・・・」

僕がつぶやいた時、部屋の暗闇から声がした。

「化け物とは失礼だな・・・。まあ、今この場でお前を俺が食うんだがな・・・ぐががが」

そこには、人面犬と犬顔人間の二匹が立っていた。

「坊主。俺達は実際に居るんだぜ・・・ぐががが」

そう言って、人面犬は僕に向かって飛び掛っていました。

そのとき、学校で聞いた言葉が思い浮かびました。

「本当に居るって」

くすくすくす。

自分のことを飾らなければ、こんな迷路に迷い込まなかったのにねえ・・・。

人ってどうしてこうも自分を飾るのかしら？

でも、まあ私も昔は同じだったからねえ。

人のことは言えないか・・・うふふふ。

式語り 人面犬と犬顔人間（後書き）

はい。本当に名前をつけるセンスがなくすみません。

今回の話はどうでしたか？

ご感想をお願いします。

では、ここここまで読んで下さり感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3289c/>

二つの箱

2010年12月25日02時32分発行